テサロニケ一 4:13-18「キリスト者の死生観」

「兄弟たち、既に眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してくださいます。主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちよりも先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。ですから、今述べた言葉によって励まし合いなさい」

今日の聖書箇所において、「キリスト者の死生観」と言うべきものが示されております。キリスト者の死生観。すなわち、どのように死ぬのかを考えることが、どのように生きるかを考えることである。死ぬことを考えるとは、生きることを考える。生きることを考えるとは、死ぬことを考える。それが死生観であります。

生きることを考える。それは、死ぬことを考えることだ。

われわれは、どのように生きるべきなんだろうか。パウロの結論によりますれば、「励まされて生きる」というのが、それでありまして、わたしたちの新共同訳聖書では、4 章 19 節が「励まし合いなさい」となっているんだけれども、口語訳聖書では「慰め合いなさい」となっております。ここではむしろ「慰め」という訳のほうを採用したいと思います。

すなわちわれわれは、どのように生きるべきなんだろうか。福音による「慰め」を受けて、その慰めによって、われわれは生きるべきだ、ということでありま

す。恐れて生きるんじゃない。不安で生きるんじゃない。疑いを生きるんじゃない。失望と悲しみに生きるんじゃない。福音による「慰め」を受けて、その慰めによって、われわれは生きるべきだというんであります。それはまた、古いプロテスタントの信仰告白でありますハイデルベルク信条の冒頭第一番に言われていることであります。すなわち、ハイデルベルク信仰告白第一問「生きている時も、死ぬ時も、あなたのただ一つの慰めは、何ですか」　答え「わたしが、身も魂も、生きている時も、死ぬ時も、わたしのものではなく、わたしの真実なる主イエスキリストのものであることであります」

福音による「慰め」とは、このわたしがまったくキリストイエスのものとせられているという事実。わたしの全存在がキリストイエスに所有せられ、キリストイエスによって満たされている、という事実であります。ここにおいてはもう、生きることも、死ぬことも、キリストによって相対化せられてしまっておりますから、生きること、死ぬことが、もうわれわれを脅かすことがありません。

さて、このテサロニケの信徒への手紙に表されましたキリスト者の死生観におきまして、注目しなけりゃならない第一番の眼目は、「眠り」ということであります。

すなわち、キリスト者の死生観においては、キリスト者が「死ぬ」という言葉自体がもうあんまり用いられない。そこではむしろ、キリスト者が「眠る」という言い方がされるのであります。

いったい「眠る」というのは、朝が来れば再び目を覚まして起き上がるということを前提にしているゆえの「眠る」であります。だから、ずっといつまでも眠っているということがあるはずがない。永遠の眠り、という表現を時々お葬式で聞くことがありますけれども、あれはずいぶんおかしな言い方だ。眠るっていうことは、期限が切ってあるのであって、いつまでも眠っているというものではない。再び目覚める時が来るゆえの「眠り」であります。

キリスト者は息を引き取って、棺におさめられて、墓に葬られますけれども、やがて永遠の朝がやってまいります。主イエスキリストの再臨の栄光がまばゆく輝いて、陰府から闇を払います。王の王、主の主イエスキリストが「起きろ！」と大号令をおかけになる。すると、眠っていたキリスト者はみな目を覚まして、新しいからだを与えられて、起き上がってまいります。

起き上がるときに、われわれは何と言うんだろうか。たいがい「おはよう！」と言いますけれども、たしかに復活の朝、主イエスキリストは女の弟子たちに「おはよう！」と声をおかけになった。マタイ伝第 28 章 7 節から 10 節にこう記されております。「『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。確かにあなたがたに伝えました』　婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、『おはよう』と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。イエスは言われた。『恐れることはない』」

「おはよう！」というイエスさまの声は、最初の復活の朝、世界に響きました。だが、「おはよう」はそれで終わりなんじゃない。もう一度「おはよう」がある。すなわち、主イエスキリストのものとせられ、主イエスキリストにまったく所有せられているところの人たち、キリスト者と呼ばれるひとたちが、いまはまだ「眠り」についているんだけれども、みんな目覚めて、起き上がって、「おはよう！」と言う朝がやって来る。その朝が来た日には、とどろくばかり無数の「おはよう！」が世界を満たすでありましょう。「イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してくださいます。」(テサロニケ一 4:14)

キリスト者の死生観について第二番目の眼目は、「生きるか、死ぬか、どちらがいいとも限らない」ということであります。

生きていればいろいろ、いいことはあるでありましょう。生きていれば、いろいろの喜び、いろいろの楽しみがございます。だが、わたしたちキリスト者に

とって究極の喜びは何でありましょうか。主イエスキリストと顔と顔と合わせてお会いすることがわれらの究極の喜びであります。中世の神学者のトマス・アクィナスという人は、これを「至福直観」と呼びました。すなわち、わたしたちが顔と顔と合わせて直接神様を見るということ、これがわたしたちの究極の喜び、究極の幸福だということであります。で、パウロが言いますのに、「主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちよりも先になることは、決してありません」という。いま生きているわたしたちと、もうすでに眠ってしまったひとたちと、果たしてどっちが神様と顔と顔と合わせて先に見るんであろうか。どっちが先なんだろうか。生きているわたしたちか、眠った人たちか。生きているわたしたちじゃない。眠っている人たちが先に見るんだ、ということであります。

生きているわたしたちは、この地上に生きているかぎりにおいて、あのこともしよう、このこともしよう、あれもほしい、これもほしい、と考えて、いろいろのことをするのであります。そうではあっても、満足しきれなくって、時に退屈であったり、時につまらなかったり、時にうんざりしたり、時にさびしくって仕方がないのであります。

ところが、もう眠ってしまった人たちは、どうなんだろうか。彼らはわたしたちより先に、大いなる喜びに与るというんであります。顔と顔と合わせて直接神様を見る、イエス様を見るという、この究極の喜びに先に与るのは、わたしたちじゃなくって、彼ら、眠っているひとたちなんです。

そういうことになりますと、生きているのと眠ってしまうのと、どっちがいいんだろうか。われわれは当然、生きているのがいいに決まっている、と考えるわけですが、しかし、この究極の喜びという観点から考えるのであれば、すでに眠った人たちのほうが、わたしたちより先に、この究極の喜びに与るのであります。

だからといって、生きているわたしたちが死に急いでいいということじゃあないんだけれども、しかしまた逆に、わたしたちは眠ってしまったひとたちにつ

いて、まるで望みなきもののように嘆き悲しんではいけない、ということであります。

キリスト者の死生観についての第三番目の眼目は、「みんな一緒に」ということであります。

「起きなさい！」というイエスさまの大号令とともに、眠っていたキリスト者たちはみんな新しいからだを与えられて、目が覚めて、起き上がって、「おはよう！」と口々に言います。世界が「おはよう！」で満ちる永遠の朝であります。そこにおいて、わたしたちいま生きているものたちが、おいてけぼりにされるわけではない。先に眠ってしまったひとたちだけが、先に出発して、先にイエス様のもとに行ってしまう。生き残ったわたしたちはおいてけぼりにされてしまうという、そんなことではない。

生きているのも、死んだものも、「みんな一緒に」イエスさまのもとへ行くんだ、ということであります。これはいったい不思議なことでありまして、先に眠った人たちと、いま生きているわたしたちとで、一緒になって、一緒にイエスさまのもとへ行くっていう、これがどういうふうに未来に実現するのか、わたしたちの小さな頭では理解しかねることであります。

しかし、その小さな頭をめいいっぱいに使って、パウロはこういう壮大な仕方でもって、この究極の出来事をわれらの眼前に描きだそうとするのであります。すなわち、こういうふうであります。

「合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります」

ここの最大の眼目が「一緒に雲に包まれて引き上げられる」ということであり

まして、「一緒に」ということであります。

引き裂かれたものがつなぎあわされる時が来るのであります。切り離されたのが結びあわされる時が来るのであります。割れたものが一つに合わされる時が来るのであります。先に眠った人たちも、いま生きているわたしたちも、みんな一緒になって、主イエスさまのみもとにいるようになるのであります。

この「一緒に」ということにおきましては、究極の平等が実現せられております。もうイエスキリストにおいて奴隷も主人もないんである。もうイエスキリストにおいて男も女もないんである。もうイエスキリストにおいて金持ちも貧乏人もないんである。もうイエスキリストにおいてユダヤ人も外国人もないんである。もうイエスキリストにおいて敵も味方もないんである。もうイエスキリストにおいて生きてるものも死んだものもないんである、ということであります。

それはパウロがエフェソ書1章10節において、こう述べているとおりであります。「時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです」

最終的にわたしたちはみんな、キリストにおいて一つにせられるのである。わたしたちはみんな、ここへ、このゴールへ向かっているお互いである、ということであります。

もちろん、わたしたちは時間の中に身をおいておりますゆえ、「あまりに早い」と感じるときがあるでありましょう。「あまりに遅い」と感じるときがあるでありましょう。「まだ時でないのに」と思うことがあるでありましょう。「いったいいつまで待てばよいのですか、主よ」と思うことがあるでありましょう。

しかし、最後の地点においては、わたしたちはみんな「一緒」に、主イエスキリストのみもとにいるようにされるのでありまして、この最後の地点まで来ま

したならば、確かに「早すぎた」ということはなかったのだ。また「遅すぎた」ということもなかったのだ。神様はすべてのことを確かに相い働かせてわたしたちの益としてくださった、ということが実感せられるはずであります。

そうしてこの「一緒」に、ということにおいては、神様が注がれる愛の平等ということをも考えるのでなければなりません。「雲に包まれて引き上げられ」という表現は、イエスさまが復活なすって四十日間弟子たちに姿を現わされたのちに、オリブ山の頂上から天に昇って行かれて、その時、雲がイエス様を包んだというふうに記録されております。そうして、この雲に包まれるというのは、聖書では「神様の栄光に浴する」「神様の栄光にあずかる」ということの具体的な表現であります。

イエスさまの弟子たちは、いったいだれがイエスさまの右側に座るのかという席順問題をめぐって、もめにもめたんですけれども、これは、自分たちの中で誰が偉いかという争いであります。わたしたちの考えの中では、だれそれはわたしより偉いとか、わたしはだれそれより偉いとか、そんな考えがばっかりでありまして、それでもってわたしたちは腹を立てたり、嘆き悲しんだり、有頂天になったりしている。

けれども最後の最後に「神様の栄光に浴する」「神様の栄光にあずかる」というこの地点におきましては、だれが一番でだれが二番だ、だれが上でだれが下だなんてことはもうないのだ。みんな一緒に雲に包まれて引き上げられるのであります。

いっさいのものごとの究極の結末が、こういうことであるのなら。みんなが一緒に神様の栄光に与るという、これが、われわれみんなのほんとうの行く末であるのなら。そっから、この一番終わりのところから考えて、わたしたちは今をどう生きるかを考えるのでなけりゃならない。

すなわち、わたしたちがいまこうして生きている間に、だれが先でだれが後なのか、誰が一番でだれが二番なのか、だれが偉くてだれが偉くないのか、そん

なことを考えるのは、究極の結末に照らすのならば、全部意味がない、ということであります。

では、わたしたちはどう生きるべきなのか。もう上も下もない。すべての人が兄弟姉妹であって、すべての人を分け隔てなく愛すべきであるという、これがわたしたちの現在の生き方になるべきはずであります。これが、生きることを考えるとは死ぬことを考える、ということであり、死ぬことを考えるとは生きることを考える、というキリスト者の死生観であります。

わたしたちは、悲しんで生きるべきでない。恐れつつ生きるべきでない。不安に生きるべきでない。福音の「慰め」によって生きるべきであります。その「慰め」とは、眠った人たちが目覚めて、新しいからだを与えられて、起き上がる、永遠の朝が来るという「慰め」であります。さらにまた、生きているというのが、いいんでもない。死んでしまうというのが、いいんでもない。どちらがいいというんでもない。生きているものも死んだものも、最後にはみんな一緒に主イエスのみもとにいるようにされる、みんな一緒に神様の栄光に与るようにせられる。そういう「慰め」であります。そこにおいて大切なのは、ほかにはありません。わたしのために十字架にかかって復活してくださった主イエスキリストが、まったくわたしを把握し、まったくわたしを所有していたもうという、この信仰の事実に立つことであります。お祈りいたしましょう。

祈り

天のお父さま。あなたの宇宙創造のご計画の唯一の目的は、究極的な愛であります。すなわち、天にあるもの、地にあるもの、生けるものも、死せるものも、すべてのものをキリストイエスにおいて一つに結び合わせて、ひとつとせられたわたしたちを神様の栄光に浴させたもうということにあります。そのようにひとつにせられる日、永遠の朝がおとずれ、陰府の闇が吹き払われ、眠っているひとたちが目を覚まし、生きているわたしたちがまったく新しくせられて、もうだれとだれ、かれとかれの間にいかなる差別もなく、わたしたちみんなが

一緒に引き上げられるという、どうかその日を、あなたが一日も早く来らせてくださいますように、心からお願いいたします。
そうしてまた、すべてのものごとの究極が、このような愛の完成であることを思いまして、逆にわたしたちの今日の生き方がどうあるべきかを反省することができますように。互いに愛し合い励まし合いなさいというイエスさまのお言葉を、どうかわたしたちが今日実行できますように、お導きください。
主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン